

昭和末期の水前寺江津湖公園における 水辺デザインの変化に関する研究

森岡 晃史¹・田中 尚人²

¹学生会員 熊本大学大学院自然科学研究科
(〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39-1, E-mail:146d8830@st.kumamoto-u.ac.jp)

²正会員 熊本大学准教授 政策創造研究教育センター
(〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39-1, E-mail:naotot@kumamoto-u.ac.jp)

江津湖は、熊本市南東部に位置する豊かな水辺や緑地をもつ貴重な地域資源である。江津湖では時代の推移とともに起こる環境変化や、利用者ニーズに応えた多彩な公園整備が計画されてきた。本研究では、江津湖全域の活用と開発が盛んに議論された昭和47年、昭和57年代提案された2つの整備計画図と当時の利活用状況を歴史的に把握し、整備計画が後の空間活用に適切に反映されているか分析を行った。その結果、各時代で江津湖に求められた機能は異なるが、市民が集える空間として整備する思想は一貫しており、地区ごとに多彩な整備を行い、今日まで豊かな湧水と緑地を体感できる行楽地、市民の憩いの空間へと進化してきたことがわかった。

キーワード:水前寺江津湖公園, 親水空間, コミュニティ, レクリエーション, パークマネジメント

1. はじめに

(1) 本研究の背景および目的

熊本市は樹木の多い自然景観に恵まれた都市であり、1896 (明治29) 年に夏目漱石が評した「森の都」の愛称で市民に親しまれている。なかでも本研究の対象地である江津湖は、熊本市南東部に位置する豊かな水辺や緑地をもつ貴重な地域資源であり、周囲では豊かな自然と自然を活かした構造物、そこに憩う人々の営みが調和した景観が見られる。

江津湖周辺地域は1930 (昭和5) 年に風致地区に指定され、1966 (昭和41) 年には江津湖公園として公園整備が行われた。1972 (昭和57) 年には、隣接する水前寺公園とともに広域公園水前寺江津湖公園として都市計画決定された。これらの計画のもと江津湖では都市化の進展による各時代のニーズに対応するため多彩な公園整備が行われてきた。その結果、様々な年代の利用者の幅広い活動を支え、多様な進化を遂げてきたといえる。

江津湖周辺地域の風土形成の変遷と風致地区指定以降の熊本市域における江津湖の役割、位置づけを関連させ記録した先行研究は存在しない。本研究では江津湖全域の活用、開発が盛んに議論された昭和40年代から昭和50年代に提案された2つの整備計画と当時の利活用状況を歴史的に把握し、計画が後の空間活用に反映されたか分析する。結果をもとに江津湖では時代の要請に応えた多

彩な整備が展開され、市民にとって地域に根差した多様な憩いの空間として進化してきたことを明らかにする。

(2) 本研究の位置づけ

本節では、既往研究の整理をふまえ、本研究の位置づけを行う。江津湖に関する研究は少なく、本田らによる「近代熊本都市計画における江津湖の位置づけに関する一考察」¹⁾では、熊本市内の風致地区指定前後の都市計画を整理し、風致地区指定当時の江津湖の位置づけ研究を行っている。本田らは「都市部に近いにも関わらず、周辺を緑地に囲まれた良好な環境を持つ江津湖は古くから市民に親しまれてきた行楽地である。それゆえ公園化の意向があり、風致地区指定が都市計画区域決定時から想定され、当初より都市計画区域内に含まれていた。近代熊本都市計画および大正後期から昭和初期にかけて活躍した内務省の都市計画技師である北村徳太郎の都市計画思想の実践において江津湖は「市民永久の慰楽保存地」として重要な位置づけにあった」と指摘している。

しかしこの研究は、江津湖が風致地区に指定された直後の地区整備のみを扱ったもので、以後の空間整備には触れられていない。以上のことから、江津湖整備に関する過去の計画や資料を用いて、未だ詳細な解析が行われていない空間整備の変遷を調査することは、現在の江津湖が熊本市民にとって地域に根差した憩いの空間へと進化してきた過程を考える上で重要な意義がある。



図-1 研究の構成

(3) 本研究の構成

本研究は5部から構成されており、以下に各概要を示す。第1部では本研究の背景と目的に加え、関連する既往研究を整理し、本研究の位置づけを確認する。第2部では研究対象地の定義と概要を整理する。また風土形成の変遷と江津湖周辺地域の利活用に着目し、江津湖周辺の都市開発史をまとめる。第3部では江津湖周辺地域の各時代の整備構想に着目し、各地区の開発テーマや方針の変遷を把握する。第4部では過去と現在の計画画面と航空写真を用いた空間的特徴の分析を行う。第5部では各章の分析から得られた情報を整理し、結論を述べるとともに今後の課題を示す。(図-1)

2. 江津湖周辺の地域形成と果たしてきた役割

(1) 江津湖周辺地域の概要²⁾

江津湖(写真-1)は、熊本市中央部から南東役5kmの地点に位置している。緑川の支川である一級河川加勢川の一部に属しており、延長約2.5km、周囲6km、湖水面の面積約50haである。江津湖はひょうたん型をしており、国道57号線(東バイパス)江津斎藤橋を境に上江津湖と下江津湖に分かれている。

江津湖はかつて湖ではなく成趣園の清水が流れる江津川であった。江戸時代初期に至り、加藤清正により江津川右岸に江津塘と呼ばれる堤防が築造され、西南方向に流れていた湧水がせき止められ江津湖が形成された³⁾。

菊池台地や詫麻大地の地下水を源とする湧水は、熊本市街地でありながら1日40万トンの量が湧き出ており、全国でも有数の湿地である。この湧水は水前寺公園から上江津湖、下江津湖の北岸の随所に見られ、これまで多くの動植物を育むとともに、生活を支える源となってきた。周辺には水田が多く見られ、古くより豊富な湧水を利用していたことがわかる。江津湖の魅力は澄んだ美しい湧水であり、上江津湖産のスイゼンジノリは1924(大



写真-1 現在の江津湖
(筆者撮影)



写真-2 舟遊びをする人々
(熊本市歴史文書資料室蔵)

正13)年に国から天然記念物の指定を受けた。

上記のように、江津湖は地域住民の生活の場であったが、一方で行楽地としても親しまれてきた。江津湖は古くより水遊びの場であり、明治時代には既に第五高等学校によるボートレースが開催されていた。またプールのない時代には、絶好の水泳場であり、舟遊びにも好適で夏場の市民の憩いの場であった。夏季の江津湖における水遊び、舟遊びの様子(写真-2)は大正期や戦前期の絵葉書にも見られる。江津湖は芸術家からも表現対象として高く評価されており、数多くの文学碑が存在する。

以上より、江津湖は公園として整備される以前から市民に行楽の地として親しまれていたことがわかる。

(2) 江津湖周辺地域の利活用史

a) 都市計画法(旧法)施行から風致地区指定⁴⁾

1920(大正9)年に旧都市計画法が施行され、熊本市には1923(大正12)年に適用された。1925(大正14)年に第1回都市計画熊本地方委員会が開催され、熊本市のさらなる発展のための計画案が練られた。

熊本都市計画風致地区は1931(昭和5)年に開催された第5回委員会でも八景水谷・立田山・成趣園・江津湖・花岡山・万日山・本妙寺山の7地区が指定された。地方都市での風致地区の指定は国内初であり、当時の総指定面積323万坪も京都に次ぐ2番目の面積であった。以上より、全国的にみても熊本の風致が特徴的かつ重要であったことが示唆される。

b) 戦後の観光資源としての議論⁵⁾

江津湖の活用が熊本市議会の議題に上がったのは戦後間もない1948(昭和22)年6月の臨時議会においてであった。「水前寺と江津湖を活用して市民の憩いの場とすべきである」という趣旨のもと翌年の1949(昭和23)年8月の市議会では「熊本の観光には水前寺、江津湖と阿蘇を一体として活かすことが大切」と表明され、熊本観光のなかでの江津湖の位置づけを明らかにした。しかし、具体的な内容まで踏み込んだ議論はされていない。

江津湖の具体的活用が議会で論じられたのは1951(昭和23)年3月の定例会である。増加傾向の観光客数から、当時不足していたホテルの充実を図るため、江津湖畔に文化ホテル建設の提案があった。1953(昭和25)年9月

の熊本日日新聞には「県とタイアップして遊園地の整備強化を計画している」と報じ、遊歩道、子供遊園地、休憩所を自然景観を損なわない程度に配置するとしている。1955（昭和27）年2月の第2回定例議会では、江津湖の積極的活用に関するより具体的な提案が行われた。

当時の熊本市の観光開発のテーマは水前寺、江津湖が重視されている。江津湖を観光資源として市民や観光客のために活用せよという議論が活発であったことが理解でき、市民の期待の高まりに行政が動き始めた時期である。

c) 江津湖周辺開発と環境汚染問題

1960（昭和35）年、江津湖に対する市民の関心は高まり、市議会でも「江津湖は市民の顔であり、市民の期待にこたえる観光空間に」との意見が出された。整備領域は江津湖周辺地区に拡大され、開発第一弾は1969（昭和44）年4月1日に開園した水辺動物園である。家族連れが一日楽しめる施設とし、市民にとって憩いの場、教養の場として広く親しまれた⁹。

しかしこの頃、江津湖はタイワンナギ（ホテアオイ）の大量発生をはじめとする環境悪化に悩まされていた。1953（昭和28）年の熊本大水害を契機として、湖水の質および量の両面で変化が現れた。以後、環境悪化は昭和30、40年代と続いていく。この問題については1971（昭和46）年5月の第4回定例議会で取り上げられている。

当時、江津湖の開発が広がりを見せる一方で、熊本市の都市化の発展が江津湖の環境汚染をもたらし、市民の関心事にもなってきた。観光のみに焦点をあてた行政主導の整備には限界があったことがわかる。

d) 環境改善整備の広がりや市民活動の活発化

1972（昭和47）年9月第3回定例会で市議会は日々悪化する都市汚染に立ち向かい、快適な都市環境づくりを進めるために「森の都宣言」を可決した。「市民の総力を結集して緑と水の保全・回復につとめ、熊本市を緑の都とすることを宣言する」⁷という内容であった。1973（昭和48）年2月、熊本日日新聞は「県と市が下江津湖一帯を都市公園化 新年度から13億円で」⁸と報じた。都市公園化による整備事業の大柱は湖底に堆積する泥の浚渫と周辺の整備事業であった。これは大水害の際に市街地に堆積した泥土の捨場に江津湖が指定された際のものであり、江津湖の環境悪化の原因でもあった。

この時、湖面を覆いつくすタイワンナギの除去（写真3）も行われた。作業には陸上自衛隊の出動を要請した事もあった。上江津地区の整備は進み、市公園課によって清掃管理も行われていた。しかし下江津地区ではゴミの不法投棄などの問題が生じ、上流水前寺公園の減水問題も重なり、汚水・濁水・ごみの三重苦に苦しんだ。

同じ頃、江津湖の美しさを取り戻そうと願う市民による清掃活動（写真4）などのボランティア活動が活発に



写真-3 タイワンナギの除去を行う市民⁹

写真-4 下江津地区の清掃活動を行う市民¹⁰

なった。また水質汚染の原因となっていた下水を改善するために下水道整備促進を求める請願運動が1979（昭和54）年に始まった。市民活動の盛り上がりを受けて、市は県と協力して江津湖の大再生作戦を展開することになり、1979（昭和54）年度に事前調査をする方針を打ち出した。「昭和28年大水害以来、土砂の堆積と都市排水の流入などで傷めつけられる江津湖を昔の姿に復元する」と、熊本日日新聞も江津湖クリーン作戦を朝刊トップ記事で報道した。市民の江津湖への関心と環境改善への参加意識は益々高まっていた。

1981（昭和56）年3月に県が行った「江津湖に関するアンケート調査」¹¹（対象者は熊本市、益城町、御船町、嘉島町、富合町、城南町の1市5町の4540人、回収率66.4%）では、回答者の90%が江津湖で遊んだことがあると答え、50%が今の江津湖は汚れていると認識している。江津湖を汚さないためには教育を通して住民の意識を高めることが必要という意見が得られた。将来の江津湖については「自然のままに保存してほしい」と希望する人が74%と圧倒的に多かった。またトイレ、案内板、植樹、駐車場整備などを今すぐ必要とした人が多く、都市公園としての整備が望まれていることが見てとれた。

e) 整備の発展と広域公園水前寺江津湖公園の誕生¹²

昭和50年代後半になると江津湖の水質浄化対策への具体的計画が進行し、市民意識の高まりとともに江津湖の浄化と整備は加速的に進行した。熊本日日新聞は1983（昭和58）年元旦号で「グリーンクリーン熊本」作戦の展開を表明した。市は1983（昭和58）年3月に「水前寺江津湖公園整備実施計画研究会」を発足し、5月の市議会で水前寺・江津湖整備特別委員会の設置を決定、市民の憩いの場である江津湖一帯の整備について調査するとした。8月の県市連絡会議では、水前寺・江津湖の歴史を生かした新しいシンボルをつくり、「ふれあいの森」づくりを進めることで一致した。12月の県政懇話会で細川護熙知事は、水前寺および江津湖一帯がひとつの広域公園として管理される江津湖整備を目的としたプロジェクトチームを県市一体でつくる提案を行い、江津湖美化整備に関する県市連携が急速に進んだ。並行して市は1984（昭和59）年2月の議会公害対策委員会において水質浄化と江津湖周辺整備を合わせ、市民が期待する憩い

の場となる公園づくりの取り組みが始められた。1986（昭和61）年、県は「花と緑の国体」といわれる全国的緑化イベントである第4回全国都市緑化フェアを誘致し、メイン会場として下江津湖畔に植物園の整備を進めた。

県と市は1982（昭和57）年度から1988（昭和63）年度までの期間に総事業費53億円を投じて水前寺・江津湖公園を整備、公開庭園、カルチャーパーク、動植物園などを整備した。1985（昭和60）年には、出水地区に新県立図書館が完成し、江津湖再生への願いを込め、江津湖に縁のある中村汀女の句碑が設置された。同年8月、市は江津湖水質環境管理計画をまとめ、汚濁の原因は上江津湖へ流入する河川からの生活排水、下江津湖内プランクトンの異常繁殖によるものであるとし、対策を講じた。

半世紀にわたる浄化事業により、江津湖はその装いを少しずつ変えながら、美しさを取り戻してきた。同時に施設の整備も行うことで、水前寺・江津湖全体が市民の目指すオアシス、すなわち憩いの場として進化を遂げた。

(3)まとめ

豊富な湧水を有する熊本市の特徴的存在である江津湖は、古くより地域に根ざした憩いの場として市民生活に密接に関わってきた地域資源であることがわかった。しかし、熊本の都市化に伴う水質汚染や環境悪化の被害は江津湖も例外なく受けることになった。自然豊かな江津湖の資源価値の低下が危惧されるなか、県と市、そして市民が互いに知恵を出し合うことで市民にとっての憩いの場を再生させる運動が活発化した。その気運を受けて水質は浄化され、水前寺地区から広木地区にわたる水前寺・江津湖全域で都市公園としての整備が行われ、その資源価値は高まった。

すなわち、時代の推移とともに江津湖周辺は様々な環境変化がおこるなか、江津湖は各時代の変化のなかで多様な利用者のニーズに対応して環境整備が行われ、各時代で一貫して求められた憩いの機能を果たしてきた行楽地であることが把握できた。

表-1 熊本都市計画と公園整備の概要

西暦	和暦	熊本県・市の動き、出来事	公園の整備事業	まとめ
1919	大正8	04.05 都市計画法(旧法)公布		水前寺地区の発展 成趣園を中心に整備が行われる。名勝史跡に指定され、付近に動物園が開園する。
1920	大正9	01.01 都市計画法 施行		
1923	大正12	07.01 熊本市に都市計画法が適用		
1924	大正13	08.01 水前寺公園入口まで市電が開通		
		02.19 第1回都市計画熊本地方委員会 開催	04.01 水前寺公園(6.1ha) 開園	
1925	大正14	11.16 第2回都市計画熊本地方委員会 開催		
		11.30 熊本都市計画区域が内閣より認可		
		01.30 第3回都市計画熊本地方委員会 開催		
1928	昭和3	02.16 熊本都市計画街路が内閣より認可		
		11.28 第4回都市計画熊本地方委員会 開催		
		01.09 都市計画地域が内閣より認可		観光資源として議論 江津湖が風致地区に指定され、観光資源として江津湖を有効活用するための整備案が議論される。
1929	昭和4		07.25 水前寺動物園(出水神社所有地・市有地の5千坪) 開園	
			12.17 水前寺公園が国の名勝史跡に指定	
				江津湖公園の開園 上江津地区の整備が行われる。また江津湖に動物園が移設され整備に広がりを見せる。
1930	昭和5	10.03 第5回都市計画熊本地方委員会 開催		
		12.01 熊本都市計画風致地区が内閣より認可	12.26 水前寺地区(38.2ha)・江津湖地区(214.04ha)が内務省より風致地区に指定	
1950	昭和25	03. 定例会 開催、江津湖の有効活用が議題にあがる		整備の広がり 下江津地区まで整備が広がる。市民による清掃ボランティア活動が活発になる。
1952	昭和27	02. 第2回定例会 開催、江津湖整備の具体案が出される		
1953	昭和28	06.26 白川大水害(6.26水害) 発生		
1958	昭和33		09.01 市立体育館(水前寺公園東側) 完成	
1960	昭和35		05.11 江津湖公園(上江津地区22.1ha)を都市計画決定	
1962	昭和37		08.01 水前寺公園(6.5ha)・下江津緑地(70.9ha)を都市計画決定	
1964	昭和39		03.19 江津湖公園(21.3ha)を都市計画決定	
1965	昭和40	03. 第1回定例会 開催、タイムナギ除去が議題にあがる		
1966	昭和41		12.24 江津湖公園(45.39ha) 開設	
1969	昭和44		04.01 江津湖地区(下江津地区)に熊本市水辺動物園 開園	
1972	昭和47	10.02 森の都宣言 第1次都市公園等整備5前年計画 策定		水前寺江津湖公園 下江津地区を含む江津湖公園と水前寺公園がひとつの水前寺江津湖公園として都市計画決定される。同時に出水地区にも整備が入り、文化施設が充実、熊本市民の様々なニーズに対応した地域資源として変貌する。
1973	昭和48	02. 県と市が下江津緑地一帯の都市公園化を決定 02.28 森の都推進会議要綱 施行 10. 緑に関する条例 施行	11.09 江津湖公園(104.0ha)が都市計画決定、下江津緑地と江津湖公園が合併	
1977	昭和52	06. 熊本市都市公園条例 制定		
1979	昭和54	06. 第2回定例会 開催、水前寺公園の減水問題が議論される		
1981	昭和56	03. 県が江津湖に関するアンケートを実施 06. 水前寺・江津湖公園基本計画構想を県が策定 05. 第2回定例会 開催、江津湖の浄化対策を議論		
1982	昭和57		07.29 特殊公園水前寺公園と広域公園江津湖公園が一体化して広域公園水前寺江津湖公園(126.6ha)として都市計画決定(共用面積は92.2ha) 02. 水前寺江津湖公園の出水地区(7.7ha)が整備開始	
1983	昭和58	03. 水前寺江津湖公園整備実施計画研究会 発足 04.04 森の都推進会議要綱 施行	12.27 風致地区の見直し 水前寺風致地区は10.0haに縮小し、江津湖風致地区は238.0haに変更 06.06 水前寺江津湖公園(126.5ha)が都市計画決定 08. 広域公園水前寺江津湖公園の面積が126.6haから126.5haに変更 10.16 出水地区に新県立図書館が開館 07.09 出水地区に市総合体育館・青年会館が開館 08.01 第4回全国都市緑化フェア「クマモトグリーンピック'86」を水前寺江津湖公園で開催	
1985	昭和60			
1986	昭和61			
1989	平成1	06.01 熊本市緑地の保全及び緑化の推進に関する条例 施行		
1992	平成3		10.01 熊本水辺動物園西側に都市緑化植物園が開園	
1994	平成5	緑化推進基本計画 策定		
1996	平成7	09.25 環境保全都市宣言		
2004	平成16	03. まちづくり戦略計画 策定		
2011	平成23	09.01 一般社団法人熊本市造園建設業協会 設立		
2012	平成24		04. 熊本市造園建設業協会が水前寺江津湖公園の指定管理者を受託	

3. 江津湖公園整備の変遷

(1) 水前寺江津湖公園の概要（現在）¹³⁾

水前寺江津湖公園（総面積126.5ha）は、一級河川加勢川を中心として延長約3.0kmにわたる公園であり、多様な景観を呈している。園内は水前寺、出水、上江津、下江津、広木の5地区に分けられる。（下江津地区は、中江津、下江津、荘口の3地区に分けられ、計7地区とすることもある。）桃山式の代表的な庭園として知られている水前寺成趣園をはじめ、熊本市総合体育館、熊本県立図書館、青年会館、熊本市動物園などの文化施設が設置されている。（図-2）熊本市南東部のみならず熊本都市圏全域において核となる公園であるとともに、多様で貴重な動植物が生息することから、自然環境の保全を念頭に置いた、市民に親しまれる水辺レクリエーションの場の形成を目指した公園整備が行われてきた。元々ある

豊かな水辺や緑地を有効活用した整備や施設配置が行われ、人々の憩いの場として長い年月にわたり広く利用されてきた。

(2) 5地区の施設概要と整備構想の変遷

a) 整備構想の変遷

水前寺江津湖公園は現在に至るまで整備計画や構想が数多く立案されてきた。1930（昭和5）年に水前寺地区と江津湖地区が風致地区に指定され、水前寺と江津湖を市民の憩いの場として有効活用することが決定された。水前寺江津湖公園として整備対象地区が広域化してきた経緯（表-2）から整備の対象地域が次第に広がりを見せていることが分かる。昭和40年代後半は、ゴミの不法投棄や水質汚染が深刻であった下江津地区の環境整備を最優先に計画がなされた。その後は水前寺江津湖公園の各地区の役割を明確とした上で、元々ある自然景観との調和を十分に考慮した計画がなされた。

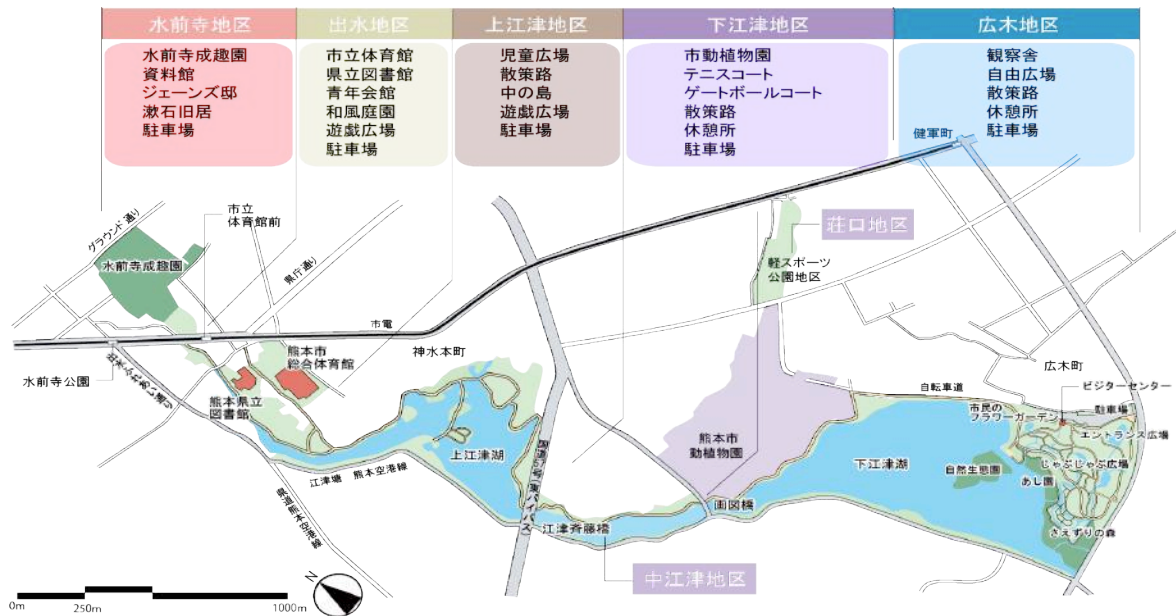


図-2 現在の水前寺江津湖公園の施設概要（園内マップに筆者加筆）

表-2 整備計画の経緯（資料¹⁴⁾に筆者加筆）

年次	1974年(昭和49)	1975年(昭和50)	1977年(昭和52年)	1979年(昭和54)	1980年(昭和55年)
対象地区	下江津地区	上江津、中江津、下江津地区	動物園周辺	中江津、下江津地区	水前寺、出水、上江津、中江津、下江津地区
内容	1.下江津湖の浅深、下水道整備 2.下江津湖畔一周プロムナード建設 3.湖岸の修景 4.動物園隣接地に花園、運動広場、馬場を作る 5.神社、鎮守の森 6.東部、東南部に釣場、植物遊園、冒険の島、ゴルフ場、郷土料理店 7.水鳥の島 8.中の島を水上ステージに 9.水面の活用について	1.自然についての認識と愛情を培い、自然保護の精神を込めた自然公園をめざしたものとす 2.上江津は都市公園的な人工的なものを加えながらも美しい自然に親しむ所とし、下江津については野鳥の特別保護地区に指定し、自然教育園をめざし、中の島は森林化する 3.下江津の自然教育園は、広木地区が最も望ましく、クレーク池沼を作り、水生・水辺植物を植え、またクレーク池には遊歩道を設け2~3箇所の休憩所、観察所を設け、その際、娯楽施設を一切入れない	1.本地区の全般は動物園を中核として各種の公園を配し、緑の一大保養所の役割をもたせる 2.休養公園、動物園、植物園、運動公園の4ブロックに分かれ、それぞれが特色ある性格をもつと同時に一貫した利用ができるよう考慮する 3.江津湖は市民が古くから親しんできた当地特有の水辺・水景であり、多様な生物の生息する環境であることを十分認識し、動物園、各公園において、原地形、原植生、景観を保存し大きな改革を加えない 4.周辺緑地は市民各階層に楽しめるものとする 5.文化会館を設け、遺物展示など郷土の認識に役立たせるとともに、市民のコミュニケーション活動促進に貢献するよう努める 6.自動車利用が増えると思われるので、総合駐車場を動物園に設置し、地区別に小規模の駐車スペースを設ける	1.計画区域の自然因子の保護・保全に努め、自然景観との整合性を十分に図る 2.水をテーマとする公園として水景の助長に配慮し、水中水際に生息する動植物の保護・保全はもちろんのこと、市民の水に親しむ場として水の利用を基調とした施設を計画する 3.緑の公園とし、主要な施設として都市緑化植物園を計画し、運営については維持、管理に十分な配慮を必要とするため有料とし維持管理の適正化を図る 4.既存木、湧水、水生植物など計画に依る要素を十分に満たす計画とし、施設は郷土色豊かなデザインで市民に愛される公園とする 5.利用の対象は市民をはじめとする熊本県民であり、子供から老人は含め男女を問わず幅広い利用を目標とする	1.自然保護と合理的活用 2.水と緑の熊本づくりの核として江津湖公園を位置づける 3.都市化社会における河川の意義を考慮し、治水、利水、親水機能の相互調整を行う 4.市民の多様なレクリエーション要求に応える 5.田園風景の創造を行い、もって都市的土地利用と農業的土地利用との景観の調和を図る

b) 昭和47年「江津湖開発計画」

1972（昭和47）年に県の委託により熊本開発研究センターによって提案された「江津湖開発計画」（表-3）は、当時の江津湖における公害問題の解決とともに、主に上江津地区、中江津地区（現在の下江津地区）、下江津地区（現在の広木地区）を市民の憩いの場として開発する整備構想案であった。計画には県職員に加え、熊本大学工学部、熊本工業大学の教員や学生などが関わり構想図が製作され、後の整備構想に大きな影響を与えた。

c) 昭和56年「水前寺江津湖公園全体計画」

1981（昭和56）年に策定された「水前寺江津湖公園全体計画」（表-4）は、水前寺江津湖公園の利用と整備の基本計画となるものである。この計画に基づいて1982（昭和57）年に特殊公園水前寺公園と広域公園江津湖公園が一体化し、広域公園水前寺江津湖公園として整備が開始された。この計画では、水前寺・江津湖一帯を7地区に分け、各地区の特徴を活かした整備を進める方針を打ち出している。

表-3 江津湖開発計画（資料¹⁵⁾に筆者加筆）

1972(昭和47)年の江津湖開発計画					
内容	1.当地区および関連地域の防災の保全(とくに対出水)が第一義的課題であり、開発施工に先だって解決されるべき				
	2.都市内に残された貴重な自然資源であることを認識し、自然保護を前提とした開発および利用を行なう				
旧・地区	3.日常生活圏内におけるレクリエーション空間として整備し、都市内におけるオープン・スペースを確保する				
	4.広般な利用者を誘致し、かつ利用者に愛される地区を創造する(地区空間が個性的であり統一的なテーマをもたせる)				
	5.地区内の計画は将来の有用な要素の発生に際して、それを容易に受け入れ得る柔軟性(フレキシビリティ)のあるスペースとして計画する				
	6.地区は公共に開放され、有料施設、民間経営施設は湖岸より一歩退き立地することを原則とする				
	7.湖岸沿いの遊歩路の通過を容認させ、湖面近くに立地する施設の休憩所、テラスなどを提供することが望ましい				
	8.一帯に設けられる諸施設、工作物はすべて、風致景観と一体化したデザインによって統一されることが望まれる				
	9.湖隣接地は積極的に公園、緑地化を図り、以外は低密度住居地域として法的に開発規制区域とする				
現・地区	水前寺地区	出水地区	上江津地区	中江津地区 下江津地区	下江津地区 広木地区
思想	観光と施設としても知名度の高い静ゾーン		まとまったスケールをもつ動ゾーン ↓ 自然保護を原則とした「都市公園」	「教養、文化的なレクリエーション地区」	雄大なスケールの田園的景観(水面・陸部)を併せ持つ動ゾーン ↓ 東部・南部地区民を対象とした「スポーツ広場(公園)」
施設計画	計画なし(水前寺体育館として利用押されていた)	計画なし(江津ガーデンポール、協和発酵熊本工場、江津荘があった)	上江津公園 パークセンター エントランス・ゾーン プール・センター 芝生広場 水上ステージ プレイ・ロット 遊歩エリア 徒歩池 水辺植物園 汚水処理場 駐車場 地区文化センター 文化センター	水辺動物園 エントランス・ゾーン 動物舎ゾーン 水辺ゾーン 遊園ひろば 水際テラスゾーン 駐車場 養魚センター 養魚センター エントランス・ゾーン	地区運動公園 運動広場 湖岸公園 駐車場 花卉園 花卉園 駐車場
左(東)岸	緑に覆いかぶされ、自動車交通の騒音も聞こえぬ最も静かな遊歩道を形成		適所に樹陰とベンチをもつレストプレースを配置	動物園内からはみだした樹緑に覆われ、やがて開放的な護岸沿いの舗装路へと続く	
右(西)岸	視界が単調なため遊歩の魅力を欠く。適所に寄身拠点となるレストプレースを設け、視覚的、心理的にも寄り所を設ける。				

表-4 水前寺江津湖公園開発計画（資料¹⁶⁾に筆者加筆）

昭和56年策定の「水前寺江津湖公園全体計画」							
内容	1.熊本都市計画公園のなかの広域公園として整備する						
	2.計画区域約130haの大規模公園であり、市東南部の公園緑地の核として計画する						
	3.水と緑の熊本づくりの核として水量や緑の景観の助長に配慮する						
	4.計画区域内既存木、湧水、水生動植物等の自然保護、保全に努めるとともに、景観、親水機能等への合理的な活用を計画する						
	5.都市化社会の河川の意義をも考慮し、治水、利水、親水機能の相互調整を行う						
	6.田園風景の創造を行い、もって都市的土地利用と農業的土地利用の景観的調和を図る						
	7.熊本市の計画による昭和65年を目標とした公園整備にあたっては、動物園、植物園(都市緑化植物園)、体育館、集会所(青年会館)、図書館を内包して計画する						
	8.利用対象は市民をはじめとする熊本県民であり、多様なレクリエーション要求に応える						
地区	水前寺地区	出水地区	上江津地区	中江津地区	下江津地区	荘口地区	広木地区
思想	成趣園を核とした「公開庭園」	江津ガーデンポール、協和発酵跡地を公園化し、整備した「カルチャーパーク」	上江津湖北東部にある空開地を核とした「子供文化園地区」	上江津地区と下江津地区を結ぶ「プロムナード」	水辺動物園、都市緑化植物園を核とした「動植物園地区」	子供からお年寄りまでが利用できる日常的「軽スポーツ公園」	低湿水田地帯を利用した「田園景観地区」
施設計画	公開庭園 資料館 成趣園アプローチ	体育館 集会所(青年会館) 図書館 市民広場 遊戯広場 和風庭園	遊びの流れ、滝、森 河原、水面 ボート乗り場、釣場 魚を捕るせせらぎ	散策の水辺	動植物園 散策の水辺 市民広場 遊戯広場	軽スポーツ園	水郷のある風景 堤塘の景観 野鳥の森、汀 サンクチュアリー 観察舎、自由広場 ビジターセンター
左岸	水辺の散策路(親水機能を持たせる)			水辺の散策道、サイクリングロード			
右岸	松橋熊本線バイパス整備後パークウェイとして車道サイクリングロード、散策道の整備を行う						

4. 昭和47年と昭和57年の計画にみるしつらえの変化に関する比較分析

(1) 水前寺地区

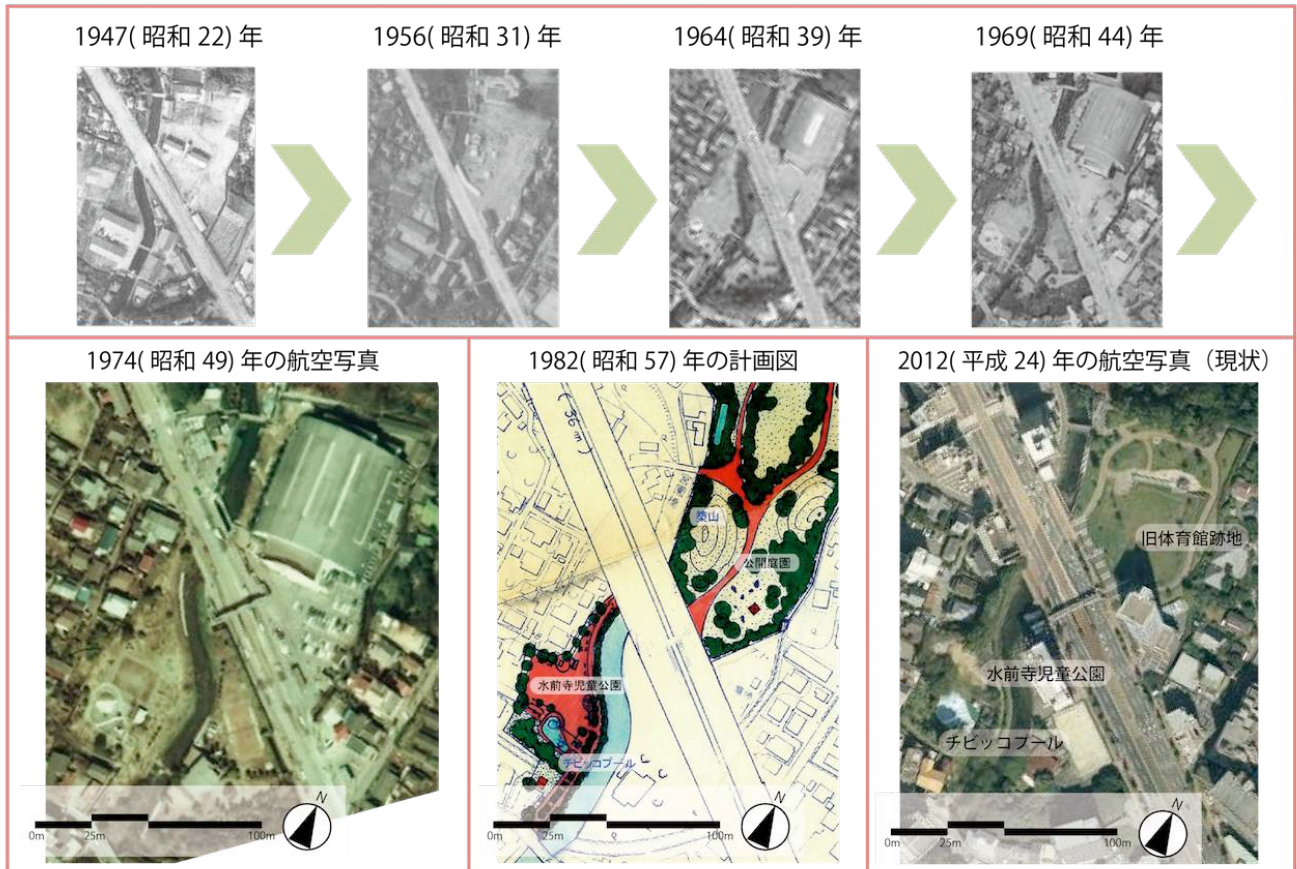


図-3 水前寺地区の昭和57年の図面¹⁷⁾及び各時代の航空写真¹⁸⁾

a) 沿革（昭和47年以前）

水前寺地区は、江津時代初期に造られた水前寺成趣園を核として、水前寺公園の敷地内に1929(昭和4)年に開園した水前寺動物園、公園東側に1958(昭和33)年に完成した熊本市立体育館（通称：水前寺体育館）を含んだ5地区のなかで最も初期に施設整備が行われた地区である。

昭和30年代になると動物園の来園者の増加で拡張が望まれたが、都市化による周囲の宅地開発が進み手狭となっていた。広い敷地への移設が望まれ1969(昭和44)年に下江津地区に熊本市水辺動物園として移転した。跡地には1970(昭和45)年に熊本洋学校師範館ジェーンズ邸が移築された。県道28号線をまたいだ現在の水前寺児童公園は昭和30年代前半までは建物があったが後に取り壊され、昭和30年代後半には広場として整備されている。

b) 昭和47年の図面と昭和57年の図面の比較

昭和47年の計画では、「観光施設としても知名度の高い静ゾーン」と記述があり、具体的な整備構想は示されていないが、成趣園を中心とした歴史的建造物の保存が重要であるとしている。昭和57年の計画では、「成趣園を核とした公開庭園」との記述があり、公開庭園、成趣園・江津湖に関する資料館を作る計画であった。また当時の市立体育館を、新たに出水地区に設置する市

総合体育館へ機能を置き換えた後、取り壊し、成趣園へのアプローチを整備するとされている。後の計画では、新たな施設整備を行うとしつつも成趣園という歴史的価値のある観光資源を守る開発を進めるという目標で一致していることがわかる。

c) 昭和57年の図面と現状の比較

現在の水前寺地区は成趣園、資料館、ジェーンズ邸、漱石旧居、児童公園で構成されている。2つの計画には児童公園に関する記述はないが、1982(昭和57)年の図面に現在の姿に似た児童公園の姿をみることができる。園内には江津湖から成趣園にむけて通路が整備されている。児童公園は整備開始以前より既に現在に近い姿で設置されており、以後大きな整備が入らなかったようである。一方、市立体育館は1982(昭和57)年の図面には庭園を意識しつつ、成趣園までのアプローチをしつらえた設計となっているが、2012(平成24)年の写真では、庭園としての設計はなされておらず、現在ではボール遊びをする子どもたちや散歩をする市民の姿を見かける多様なレクリエーションの広場として整備されたことが確認できた。なお市立体育館は1999(平成11)年の台風18号で損傷し後に取り壊された事から、現在の広場の整備は他とは別の年時に行われたものである。

(2) 出水地区

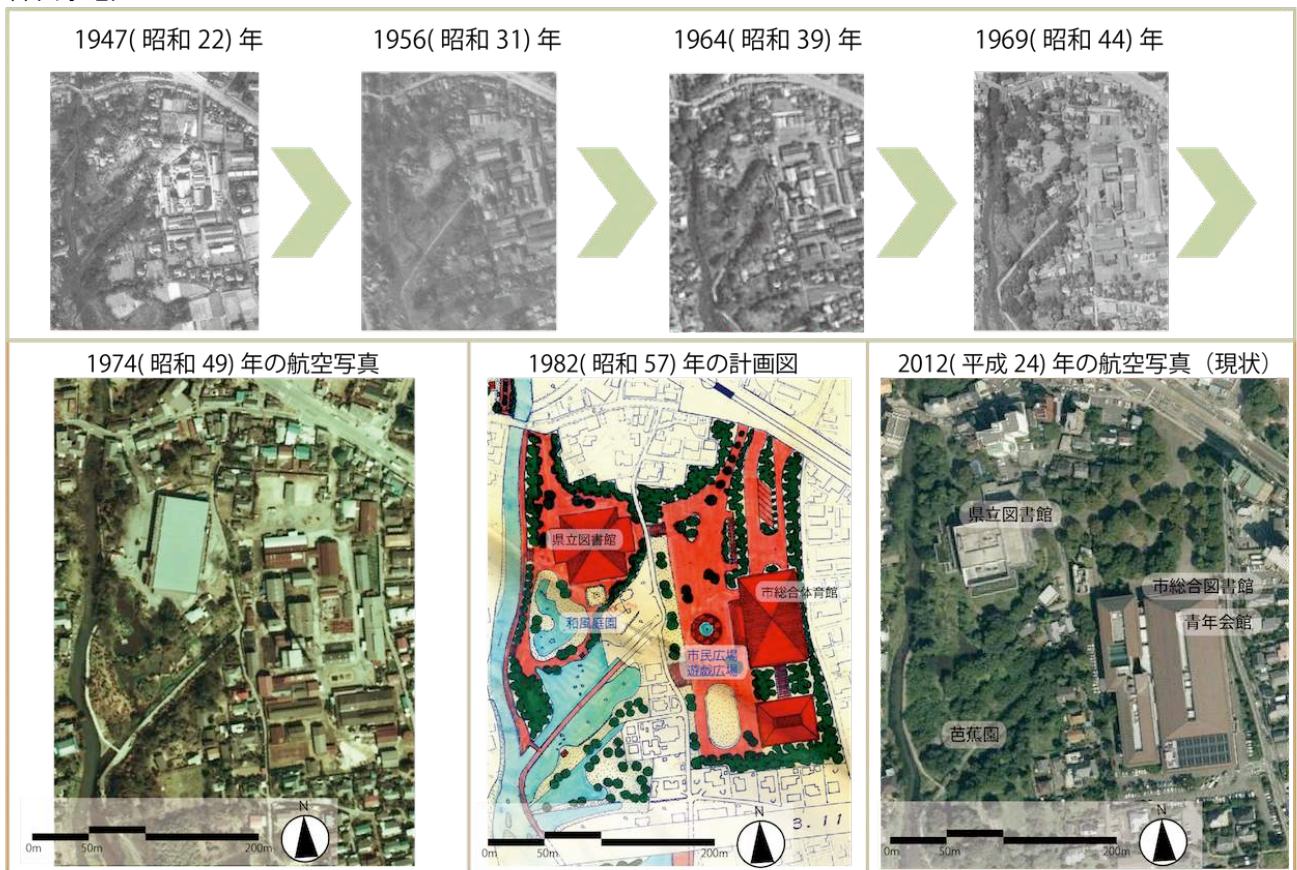


図-4 出水地区の昭和57年の図面¹⁷⁾及び各時代の航空写真¹⁸⁾

a) 沿革（昭和47年以前）

出水地区には、昭和30年頃建設された協和発酵熊本工場とともに、肥後藩により江津時代後期に造られた砂取御邸として、建物と湧き水の池を中心とした池泉式庭園があった。砂取邸は時代とともに所有者を替え、1922(大正11)年から1942(昭和17)年までの20年間は江津花壇として営業された高級料亭であり、現在では旧江津花壇跡としての知名度が最も高い。現在も存在する芭蕉園はこの時期に増設された。1942(昭和17)年から1949(昭和24)年の間は三菱江津荘として三菱の出張者の宿泊や顧客の接待に使われた。戦後の1949(昭和24)年からは井関農機が会社の厚生施設や来賓の宿泊施設として使用された。1972(昭和47)年にボーリング場である江津ガーデンボールの開設とともに、建物は取り壊された。

b) 昭和47年の図面と昭和57年の図面の比較

昭和47年の計画では、出水地区に関する記述は全く存在しない。当時は協和発酵工場と江津ガーデンボールとして機能しており、公園としての開発が計画できなかったためである。昭和57年の計画では、「江津ガーデンボール、協和発酵跡地を公園化し、整備したカルチャーパーク」として整備を行うとの記述があり、1980(昭

和55)年に熊本県が土地を買収したことにより、水前寺地区から江津湖までを一体としたひとつながりの公園として整備することが可能となった。主な施設として、県立図書館と水前寺地区の市立体育館を凌ぐ、様々な競技に対応した市総合体育館が整備される計画であった。

c) 昭和57年の図面と現状の比較

1982(昭和57)年時点で県立図書館、市民総合体育館、青年会館は着工しておらず、明確な配置が定まっていなかったために、2012(平成24)年の図面とは規模、形状ともに異なることがわかる。市民広場、遊戯広場はひとつの図書館と体育館へのアプローチの空間として整備がなされた。また全域を水景とした和風庭園の整備は、図書館裏の旧江津花壇の庭園となくす計画であった芭蕉園を保護しつつも、芭蕉園以南の親水空間は陸地のままとしている。全体的に親水空間の整備が当初の計画よりも抑えられている。

施設の配置は異なるものの、現在では施設の利用者や水景を觀賞・休憩する市民で賑わう憩いの風景が見られ、カルチャーパーク地区としての整備理念は果たしているといえる。

(3) 上江津地区

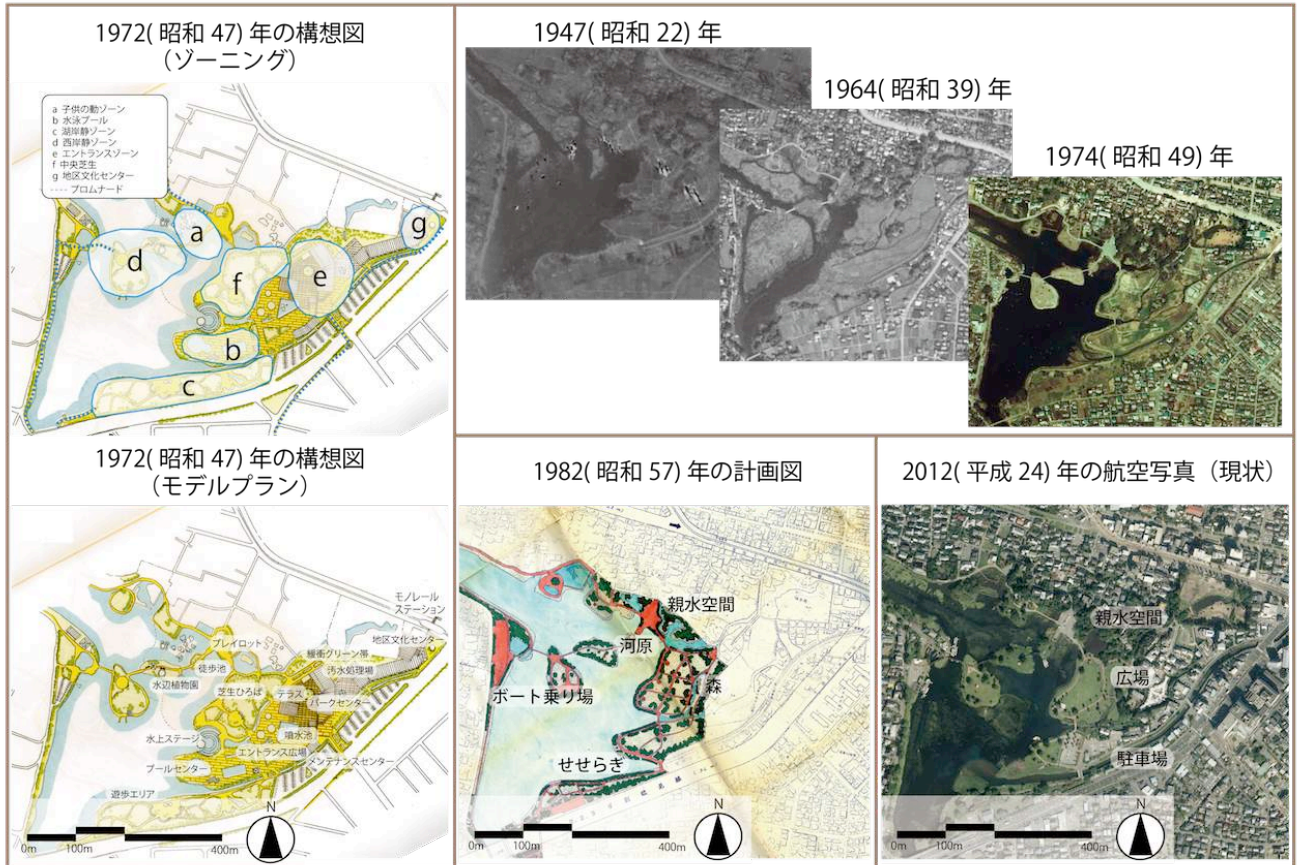


図5 上江津地区の昭和47年¹⁶⁾、昭和57年の図面¹⁷⁾及び各時代の航空写真¹⁸⁾

a) 沿革 (昭和47年以前)

上江津地区は、1960(昭和35)年に江津湖公園として最初に都市計画決定された地域である。1953(昭和28)年の白川大水害により土砂が流入し、湖面の減少とともに陸部が増加して流れが悪くなり環境悪化が生じた。昭和30年代後半にかけて湧水が豊かな北部地区から順次園路の整備がなされ、それとともに土砂流入により形成された湖内陸部の浚渫工事が進められ、現在の中島が形成された。中の島に架かる橋梁も同時期に完成している。周囲の陸地は元々田畑として利用されていたが、都市計画決定された後、徐々に減少している。また湖面に小さいがボート遊びをしている姿を見ることができる。

b) 昭和47年の図面と昭和57年の図面の比較

昭和47年の計画では、「まとまったスケールをもつ動ゾーン」と記述があり、汚濁水と清冽な水を分流する方式を採用し、人工物は水際より遠く配置し、可能な限り自然を保護することを原則とした都市公園として開発する計画であった。東岸の空地を中心に開発を行い、西岸及び上流は現在持っている自然性を厳重に保護、修復、補正を行う内容であった。具体的なゾーニングや施設配置計画も示された。一方、昭和57年の計画では、「上江津北東部にある空開地を核とした子供文化園地区」との記述があり、北東部に計画された親水空間は昭和47

年の計画の子供の動ゾーンと一致している。ここは湧水が多く、水深が浅いエリアであり、子供を安全に遊ばせるという目的に最適の場所であったためだろう。また中央にある芝生やゾーンや南部の園路も形状や導線は異なるものの、共通の機能を持った空間であることがわかる。

しかしながら、エントランスゾーンや地区文化センター、駐車場に関しては昭和57年の図面では民地のままとされており、土地の買収ができなかった。また水泳プールは、出水地区の公園整備とともに建設される市総合体育館内に設置が決まり、上江津地区に設置する必要がなくなった。中の島に計画されていた植物園についても全国都市緑化フェアの開催決定により、大規模な植物園の設置が必要となり、上江津地区では手狭であるために下江津地区の動物園横へと変更となった。

c) 昭和57年の図面と現状の比較

北東部の親水空間は、現在も水とふれあうレクリエーションを可能とする空間として存在している。計画よりも樹木数を減らし、芝生広場としてより多様な利用に対応する空間として整備されたことがわかる。また1982(昭和57)年の図面には計画にない駐車場が2012(平成24)年には見てとれる。これにより周辺住民のみでなく、郊外からの家族連れの利用者の受け入れも可能になり、付き添う大人の公園利用の機会も増やした。

(4) 下江津地区

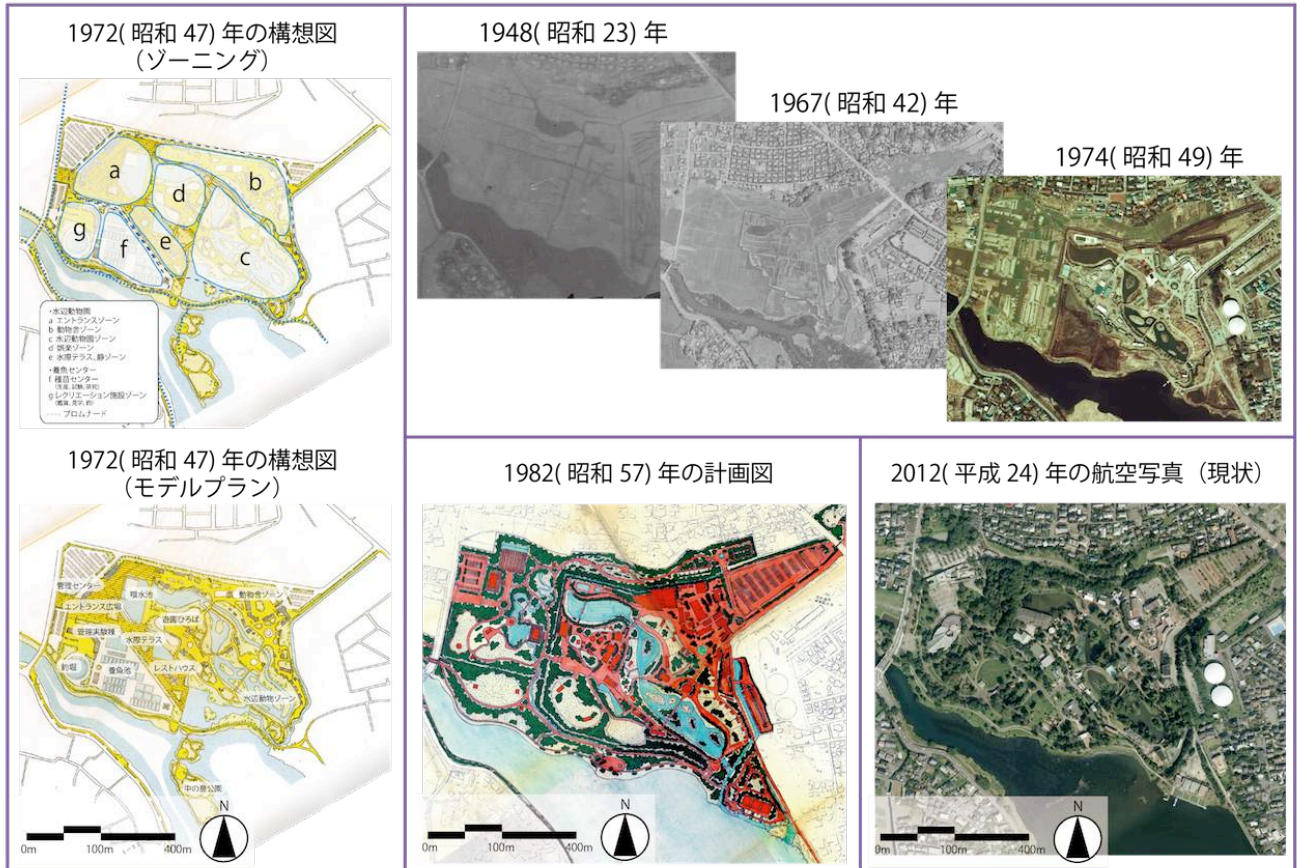


図-6 下江津地区の昭和47年¹⁹⁾、昭和57年の図面¹⁷⁾及び各時代の航空写真¹⁸⁾

a) 沿革 (昭和47年以前)

下江津地区は、1962(昭和37)年に都市計画決定されるまでは下江津緑地として水田の広がる田園地区であった。1965(昭和40)年に水前寺動物園の移転地として選定され、1969(昭和44)年に熊本市水辺動物園として開園した。当時は上江津地区から中江津地区と下江津地区を結ぶ左岸の園路はまだ整備されていない。荘口地区も都市計画決定の後、徐々に水田から空き地へと変化してきた。湖面では昭和30年代後半から陸部が目立ち、右岸の大きな陸部によって、加勢川本流のスムーズな流れを妨げ、汚水を湖全体に拡散していた。

b) 昭和47年の図面と昭和57年の図面の比較

昭和47年の計画では、「教育文化的なレクリ施設」と記述があり、核となる水辺動物園の拡充と、当時設置が計画されていた種苗センターを開発のテーマとしていた。具体的なゾーニングや施設配置計画も示された。一方、昭和57年の計画では、「水辺動物園、都市緑化植物園を核とした動植物園地区」との記述があり、エントランスゾーンは管理センターこそ設置されなかったものの、同じ場所により自然なしつらえで整備される計画となった。園内の施設は、遊園ひろばや子供用遊具の配置が異なった場所に計画し直されている。残りの施設はほぼ変更なく計画されている。しかし種苗センターの設

置は昭和47年の計画の後、すぐに中止となり、昭和57年の計画では代わりに市民広場、遊戯広場が計画された。図面からは植物園の具体的な位置は示されていない。また駐車場を増設する予定であったこともわかる。

中江津地区は「上江津地区、下江津地区を結ぶプロムナード」との記述があり、兩岸に遊歩道や休憩ができる空間を整備するとしていた。昭和57年の図面においても共通の機能を持った空間となっている。一方で、構想されていた中の島公園は、浚渫工事により姿を消している。荘口地区は「子供からお年寄りまでが利用できる日常的経スポーツ地区」とされていた。

c) 昭和57年の図面と現状の比較

江津斉藤橋から画図橋の区間(中江津地区)の左岸は上江津湖と下江津湖を結ぶ緑豊かな散策園路として整備が行われ、サイクリングロードも設置された。しかし、右岸整備は散策路のみとなった。下江津地区は、当初の計画とは位置が異なるが動植物園入口が整備され、動物園との利用一体化の促進を図っている。散策園路はほぼ計画通りに敷設されており、水景を楽しみながらの公園散策を可能としている。一方で、市民広場、遊戯広場のスペースは植物園のための空間に取って代わられた。1982(昭和57)年時点では植物園の詳細な整備計画は検討段階であったためである。

(5) 広木地区

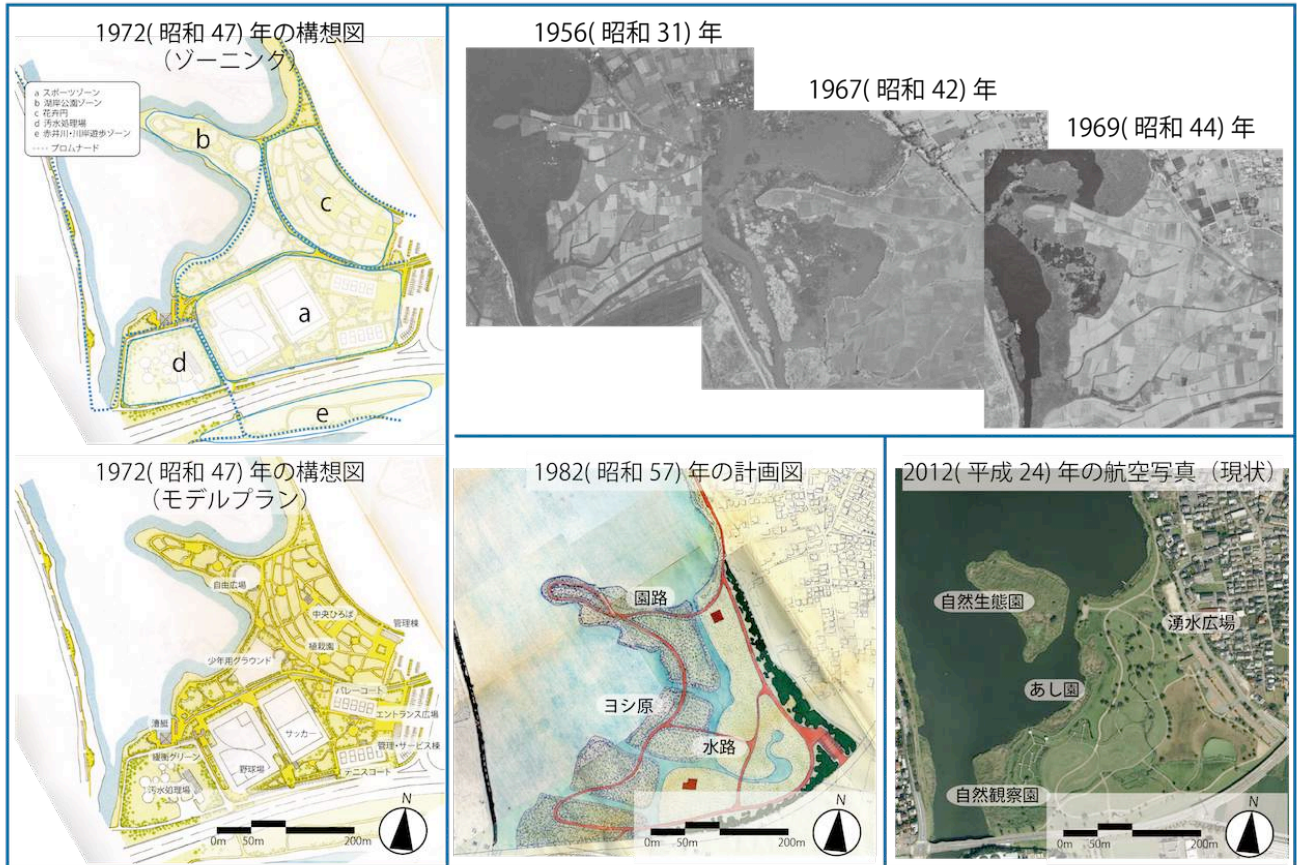


図-7 広木地区の昭和47年¹⁹⁾、昭和57年の図面¹⁷⁾及び各時代の航空写真¹⁸⁾

a) 沿革（昭和47年以前）

広木地区は1982(昭和57)年に広域公園水前寺江津湖公園として都市計画決定がなされた5地区で最後に整備が入った地区である。整備以前は豊かな湧水を活かした大規模な水田が広がる田園地区であり、都市の中にありながらも美しい田園景観を残した場所であった。多様な動植物が生息する優れた自然特性を持ち、良好な自然景観を保持していた。昭和40年代後半に農地の区画整理が行われ水田の形状が整った。一方で龍の鼻と呼ばれる突起の周辺では、汚水の流れが滞留し、泥土の堆積とともにホテイアオイの繁殖が著しい状態であった。

b) 昭和47年の図面と昭和57年の図面の比較

昭和47年の計画では、「雄大なスケールの田園的景観（水面・陸部）を併せ持つ動ゾーン」と記述があり、当時市街化区域外であったため、行政主導での田園景観の価値を尊重した開発が望ましいとした。その際、①現状維持案、②景観を守りつつ生産性を向上させる観光農園、花卉園、果樹園、観光牧場を整備する、③東部、南部地区民を主な対象としたスポーツ広場の3案が提案され、公共介入の要素が多い「スポーツを中心としたレクリエーション広場」としての整備が提案された。具体的

なゾーニングや施設配置計画も示された。昭和57年の計画でも、「低湿水田地帯を利用した田園景観地区」として整備を行うと記述があり、田園景観を重要と捉える視点は共通している。しかしながら、図面を比較すると、スポーツ広場の面影もなく、田園景観を最大限活かした自然豊かなヨシ原が生える空間に水路と園路を設置する最低限の整備計画であったことがわかる。昭和57年の図面の方が広木地区の優れた自然環境に配慮した計画であることがわかる。野鳥の森やサンクチュアリ、観察舎、ビジターセンターなどの具体的な施設配置については当時の図面からは読み取れない。

c) 昭和57年の図面と現状の比較

昭和57年の図面では場所が不明瞭であった施設も2012(平成24)年の図面では、名前を替え設置されていることがわかる。水際空間に自然生態園、あし園、自然観察園などの自然環境を守るための空間を設け、その他の空間に親水空間や多様なアクティビティに対応する大きな広場を設置した。加えて当初の計画より駐車スペースを大幅に確保することで、自動車利用が増加した現在においても、団体利用や郊外からの来訪者の利用に対応できる空間となっている。

(6) まとめ

水前寺江津湖公園は各時代のニーズに対応して多様な空間整備が計画され、以下のような整備が行われた。

- a) 水前寺地区は歴史を尊重した構想をつつも、様々な用途に対応した芝生広場を体育館跡地に設置した。
- b) 出水地区は文化施設を集中させることでカルチャーパークとして整備した。
- c) 上江津地区は子供文化園として親水空間の整備だけでなく、駐車場などの設備の充実も図られた。
- d) 下江津地区は動植物園を核とした上江津地区と下江津地区を結ぶプロムナードとして整備された。
- e) 広木地区は当初の思想を視野に入れ、自然環境に配慮しつつも、市民が利用しやすい空間として整備された。

各地区の整備テーマは異なり、一見整備の共通点はないように思われるが「熊本市民にとって身近に親しまれるような憩いの空間として整備する」という思想は一貫しており、現在の水前寺江津湖公園はそれぞれの地区の特徴を活かし市民のニーズに適応した総合的な憩いの空間としてのしつらえが整えられていることが確認できた。

5. おわりに

(1) まとめ

本論文では、江津湖周辺地域が熊本市民にとって地域に根ざした憩いの空間として進化してきたことを明らかにするために、江津湖周辺地域の風土形成の変遷と昭和40年代から昭和50年代に提案された2つの整備計画を読み取り、当時の利活用状況を分析した。以下に本研究の成果を示す。

- a) 江津湖周辺地域の歴史を把握し、時代の推移とともに様々な環境変化がおこるなか、江津湖は各時代の変化のなかで幅広い年代の利用者のニーズに対応し、各時代で一貫して求められた憩いの機能を果たしてきた行楽地であることが、文献調査から明らかとなった。
- b) 水前寺江津湖公園の整備計画の分析から、江津湖の整備は各時代で求められたニーズの変化とともに何度も修正されたことが明らかになった。一見共通点はないようにみえる整備は、いつの時代も熊本市民にとって最良の空間としてしつらえるという一貫した理念の下、5地区が多彩な機能空間として整備されたことが複数年代の図面、写真を分析することで読み取れる。この理念は、現在の公園にも共通することが確認できた。

以上より、江津湖は時代の推移とともに起こる様々な環境変化や、利用者ニーズの要請に応えた創造的な公園整備がなされたことが明らかになった。各時代で江津湖公園に求められた機能は異なるが、熊本市民が集える空間として整備するという思想は一貫しており、今日まで、熊本の豊かな湧水と緑地を体感できる行楽地、熊本市民にとっての憩いの空間へと進化してきたことがわかった。

(2) 今後の課題

- a) 文献調査のみでなく、長年にわたり江津湖周辺に住んできた市民に対してヒアリングを行い、時代の移り変わりとともに変化してきた地域の人々と江津湖との関わりについてより詳細に把握し、憩いの空間としての江津湖の理解を複合的に深める。
- b) 過去の水前寺江津湖公園の利用状況をより詳細に把握するために、利用団体や活動内容の記録を調査する必要がある。

謝辞：本研究を行うにあたり水前寺江津湖公園管理事務所当時のチーフマネージャー 柴田隆一氏、熊本県都市計画課、熊本市河川公園課、熊本市東部土木センターの皆様には貴重な資料を提供して頂き、ヒアリング調査にも協力して頂きましたことに、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 本田百合絵、田中尚人：近代熊本都市計画における江津湖の位置づけに関する一考察、土木史研究論文集28, pp.127-135, 2009
- 2) 熊本県：昭和63年度 水前寺江津湖公園単県都市公園計画調査（測量設計）委託業務 広木地区基本設計説明書, pp10-11, 1989
- 3) 熊本市：江津湖に行こう, p.4, 2011
- 4) 前掲1), p.131
- 5) 岡本良昭：美しい江津湖へ戦後五十年の再生の歩み、市史研究くまもと9, pp.3-6, 1998
- 6) 竹田齊：動物大移動ものがたり、熊日出版、2008
- 7) 熊本市：新熊本市史 別冊 第三巻 年表, pp150-151, 2003
- 8) 熊本日日新聞社：1973.2.22紙面
- 9) 前掲5), p.9
- 10) 熊本市：江津湖の自然, p.16, 1985
- 11) 熊本県：江津湖に関するアンケート調査, 1980
- 12) 前掲5), pp.11-16
- 13) 前掲3)
- 14) 前掲2), pp.16-18
- 15) 財団法人熊本開発研究センター、熊本県：江津湖開発計画に関する調査報告書, pp.110-137, 1972
- 16) 前掲2), p.19
- 17) 熊本県：都市計画の図書 熊本都市計画公園の変更 9.6.1 水前寺・画図湖公園, 1982
- 18) 国土地理院HP：地図・空中写真閲覧サービス (<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do>)
- 19) 前掲15), pp.138-148